

浄土

1978-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雜誌) 第三三五号
昭和五十三年 六月二十五日印刷 昭和五十三年七月一日発行
第四十四卷 第七号



自然一考

——ともに生きゆくために——

今年はずゆ入り宣言後、しばらくの間、盛夏を思わせる酷暑の日々が続いた。

人間とは、まことに勝手な動物で、降るべきときに降らねば慈雨を期待し、遂に長雨が続けばいらいらした気持となる。もちろん、適量が降り、そして晴れてくれれば、それに勝るものはない。しかし、自然界は、そんな

に甘いものではない。

気象予報の発達から、大体の天気は予知できるとなったものの、想像以上の変化を生ずることも、またしばしばある。今年に入ってから例をみても、伊豆沖、宮城沖を筆頭に、各地でひん発する地震は、大きな被害をもたらしたし、また、北九州地方は、一時

らに、自然界の無限のエネルギーに、ただただ驚嘆するのみである。

さて、こうした例をみてもわかるとおり、半年を過ぎた時点で、すでにこの状態である。まして、いよいよ迎える台風シーズン。この被害を、最少限度に食い止める方策が必要となってくる。

しかし、ひとは、元来楽天的なのかも知れない。ほかの地域で発生した災害に対して、同情の感をもつものの、対岸の火事的な気持をいだくほうが、はるかに強いのではないだろうか。どうしても、わが身に起きる事象とは考えられないのである。

だが一方では、そうした災害にたびたび遭遇しながらも、力強く立ち直り、より豊かな生活を求め、築きあげ、営々と生きつづけてきたことも事実である。そこには、時には自然を克服し、時には自然とうまく迎合しながら生きぬいた、ひとのたくましい姿をみることができる。

自然界の恩典に浴して生きる私たちにとって、この力を侮ることなく、着実に生きゆくことが肝要であろう。

(長谷川宣丈)



ひどいかんばつに見舞われた。このほか、妙高高原の土砂流の例もあるし、記事にならないまでも、天災地異による被害は限りないものがある。科学万能の昨今ではあるが、これだけは、なかなか解決できない。今更なが

|| 七 月 号 ||



阿弥陀ほとけの本願は、名
号をもて罪惡の衆生をみち
びかんとちかひ給ふ

——『禅勝房伝説の詞』

目 次

法 話

空 の 旅……………俵 口 隆 成……(2)

＜随想＞ 宇井伯寿先生と法然上人……………松 崎 可 定……(6)

＜ふるさと紀行＞ 駿府・今昔ものがたり……………川 村 悠 穂……(20)

自然を考える④＜医学と自然＞

自然に関する断章……………佐 竹 隆 三 ……(10)

自然と健康……………杉 田 暉 道 ……(14)

法然上人の弟子たち③

宇都宮一族のこと〔三〕……………梶 村 昇……(30)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(19)

幼児の宗教的情操教育について

——とくに思いやりの心を育てる保育を通して…安 井 昭 雄……(26)

＜表紙裏・巻頭言＞ 自然一考……………長 谷 川 宣 丈

念仏ひじり三国志⑤——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

空の旅



たわら ぐち りゅう じょう
俵 口 隆 成

(京都・西寺町専念寺住職)

○

六月の札幌はまだ初夏と云うより、晩春と呼ぶにふさわしい気候でありました。前後の日程にせばめられて、久方振りの飛錫ながらあわただしい旅の終りを札幌空港に立ちました。

近年観光ブームでこの頃より夏へかけてこの空港は人が多く、今日も神戸へ帰ると云う女子高校生の一団がにぎやかにおしゃべりをしておりました。荷物をあずけ食事をすませて出発口のロビーへ来たのが午後一時すぎで

ありました。

沢山の人の中に如何にも田舎の人らしい老夫婦と一人の青年の一组が腰掛けている隣りへ私も腰をおろして、時間迄の休憩をするつもりでありました。

青年はしきりに老爺にあれこれ説明しているが老人は何が何やらわからぬ様子で、何度も何度も問返し、青年はいろいろと答えているのが、隣りにいる私の耳に入ってきて来るのであります。どうやら老夫婦は始めて飛行機に乗るらしいのであります。

しばらくすると老爺はトイレに行きたいといい出し、

青年は時間がせまっているからと急いで連れて行き又急いでもどって来ました。如何にもこの空港の空気にそぐわぬ一組でありました。

そのうちに隣の椅子に腰掛けた私に青年の方から声をかけてきました。

「大阪へ行かれるのでしょうか」

「そうです」

「これは私の両親なのです。よんどころない用事の為、行きたいと申すもので、陸路より空路が早くてよいからと、無理をして飛行機に乗せるのですが、何しろ始めてです。どうしたらよいのやら困っているところです。

和尚さん大阪迄よろしくお願い申します。私は北見の国の紋別と云うところへ帰らねばなりません。今度の汽車に乗りおくれたら今日中に帰れませんので、どうぞお願いします。多分大阪へは知り合いの者が迎えている筈ですが、若し来てなければ神戸へ行くバスにのせてやって下さい」

「承知しました」

私はほとんど一人旅で各地を往来するのですが、又連れのあるのもよからうと思って引受けました。

しばらくすると時間が来ました。出発口を入るとこの頃はハイジャック以来、物々しい検査があります。私と老婆は何ともなく通過しましたが、老父のみは「ビイッ」と云う警音がしてポケットの中味や、頭から足まで調べられ非常に驚きました。それでも何事もなかったらしくて私の誘導に従っておどおどと待合室に入りました。私は袖すり合うも他生の縁と思い三人並んだ指定席を取りました。案内放送にうながされて機内に入り、老父を窓側に坐らせ、私は通路側に坐った。真中の席に坐った老母はシキリと尋ねかけて来ては老父に注意をし、タバコの吸いたそうなのを止めさせたり、バンドのしめ方を教えたりしていました。

やがて飛行機は飛び立ちました。雲の上ばかりでありました。しばらくして老母は、

「和尚さん、この飛行機はどこどこに止まるのです。今度止ったら伴に何かみやげを買い度いと思ひます」

と云う事であった。

「おばあさん、この飛行機は途中で止らないのですよ。二時間程かかりますが、今度下りたらもう大阪ですよ」

「そんなに大阪は近いのですか」

「空を飛んだら早く行けるのです」

「どうやら飛行機も汽車のように途中駅々に止り、窓から物が買えると思っていきたいらしい。」

しばらくすると美しいスチュワーデスが箱に入った軽食を配って来、紙コップに入った紅茶が運ばれて来た。

「和尚さんこれは何でしょうか」

「サンドイッチですよ」

「いくらお払いしたらよろしいのですか」

「これはお金はいりません」

箱のすき間から中をのぞいた老母は声を上げた。

「おちいさん、これは食べないで持って行きましょう。」

何と美しいものでしょう。丁度俵のみやげによいと思ます。和尚さん、刑務所はこんなものを持って行ってもよいでしょうか!!」

私は言葉を失った。死にみやげの旅に関西に居る俵や親類を訪れるものとはばかり思っていたのに、この老夫婦は刑務所に居る俵に、あまり永くない余命を知って最後の面会をしに行くらしい。機内食の小さな箱を大切そうに持って、自分は食べなくて獄囚の俵に与えようと、つ

らく苦しい旅をしているのであります。年老いた父母にこんな悲しい旅をさせる息子は一体どんな顔をした人間だろうか。

「長男はあんなまじめな人間なのに、二男はもう何度も刑務所のお世話になっています。今度もしばらく顔を見せないと思っていきましたら、神戸の刑務所に六年の刑で入っているとの事でした。主人はあんな奴は俺の子でない、帰って来ても顔も見んと云っていましたが、今年になって体をいたため、気が弱ったのか、命のある間には帰って来まい、生きている間にもう一度会って云うて聞かすんだと云い出しまして、長男が主人の体を心配して汽車なら二日もかかる、途中で万一の事があってはと、無理をして航空券を買ってくれました。毎日毎日口には出しません、まじめな長男より刑務所にいる二男の事が心配で心配で、もう二度と会えぬかも知れませんので、私も長男の志に感謝してお父さんについて来ました。刑務所ではどんなものを毎日いただいているのでしょうか」

私は言葉を失い続けた。同じ機内には女子高校生達が朗らかに楽しい旅の思い出を語り続けているのに、同じ神戸を目ざす老夫婦は獄窓に坐る俵を想うて暗く悲しい

旅を続けている。

機内放送が、「左に佐渡ヶ島が見えます」と伝える頃、老父は「俺又行きたい」と云い出して老母に代って私が手を引いてトイレに入ったのだが、洋式にとまどうて、どうしても出ないと云って帰って来た。何から何まで慣れぬ空の旅は年寄りにはそぐわない。

親とは有難いものだとしみじみと思いました。遠いさい果ての国から不慣れた空の旅をして、獄繋の伴に会いに来るとは、親なればこそであって他人がどうしてもこんな事をしてくれるでありましょう。理くつ抜きに有難いものです。その有難い親にどれ程の事が子として出来ているでありましょう。

無事伊丹空港に着きましたが、老夫婦に迎えは来ておりませんでした。どっさり土産物を携えた観光旅行の人ならば或は空港迄迎えましょうが、刑務所へ面会に行く人に何が迎えがありました。然し広い空港内をどこから出たらよいのか、まごまごしている人を見捨てるわけには行かず、神戸行のバスに乗せ、私は京都行のバスに乗りました。彼等夫婦に取って神戸には如何なる事が待っているのかと思うと、何とも云えない思いが胸を走る

のでありました。

○

孟蘭盆とは倒懸の意であると云われております。ただでさえ苦しい日暮しであるのにさかさにつり下げられる様な苦しみとは、凡そ想像に絶する苦しみであろうと思われます。見れば捨て置けぬ、手をさしのべて救わずにはおられぬ状態を云うのでありましょう。毎歳孟蘭盆会の来る度に丁重に先祖様の弔いの出来るのは、親の有難味をしみじみとかみしめて身は倒懸の苦に逢うても、子のために千里の道を遠しとせず来て下さる親様に、どうぞ御仏様よ救わせ給えと念じ奉るのであります。一切の衆生が只称名念仏の衆生ならば決して捨て置かぬと云う廣大無辺な力にたより、親も子も共に浄土往生の人柄となるべく、さらに一そう口称の一行にはげむべきであります。法然上人は「只一向に念仏すべし」とまことにさりげなく仰せられてありますが、思う事の万分の一も遂げられぬ微力の私共にこれ程有難い御言葉はありません。

想

随

宇井伯寿先生と法然上人

まつざき かじょう
松崎可定

(長野県飯島町聖徳寺住職)



NHKラジオの企画「にっぽん人物列伝」三夜の内、名僧高僧篇というのが、去る三月二十一日夜放送された。出席者は評論家の杉本苑子さん、作家森敦氏、及び秦恒五氏であって、座談会風に論評が行われ、わが国のいわゆる高名な祖師方を始め、安国寺恵瓊等異色の仏教者まで俎上に載せられた中で、杉本さんは、法然上人を、わが国第一等の高僧に挙げられたのは、実にわが意を得た発言と、久々に快哉を禁じ得なかった。

以前は鎌倉仏教といえ、何時も必ず法然が筆頭に挙っていたのに、近來は何かといえ、親鸞、道元、日蓮と次第され、法然は抜けてしまっている場合が多くなって

いる。この様な中で、しかも、一般人である杉本さんによるこの発言は、近頃滅多に聞くことを得ない上人讃仰の言葉であって、心から嬉しくなったのである。

最近、わが宗門人による上人の理解像すら、段々小さくなっているかに感ぜられる淋しさの中に、宗内の大会や行事等に掲げられる上人の画像のみ大きくなるのに、何か空しさを感じるのは、私一人の僻みであろうか。また、今日仏教学界の隆盛は、真に慶すべきではあるが、それでも他宗のこととなれば、一般に誤解や悪意が少なからず行われている。然るに、その中であって、故宇井伯寿先生は、他宗のわが法然上人を、極めて高く

評価し讃仰して居られた事實は、まだ余り広くは知られていない様である。それ故、本稿の「宇井先生と法然上人」と題したのは、このことを述べて見たいからである。

去る戦時中より、宇井先生は、当地方の伊那市に疎開されていた関係で、稀な機会に恵まれ、直接御指導に接し得たことは、自分生涯の幸運と感謝している。当時、この世にも比類なき仏教の大学者の前で、小さくなっていた自分に向って先生は、法然上人の偉大性について、口を極めて讃めて居られたことは、忘れることの出来ない感銘事であった。其後出版された『仏教汎論』に、上人に関して書かれた所があるので、先生直接の文章によって、その幾分かを理解して貰いたい。

「法然上人は、其一代の行蹟に現われる如く、人格円満で、画像を見ても、如何にも春風駘蕩、慈悲包擁の大人物であったと想見せられる。然し、内心に毅然たる所のあったことも窺われる所であるが、他と争い又は他を排することをなさず、其教義の洋々として、そして確固たる所は、確かに其人格の現れであると考えられる。幼少より既に文殊菩薩に比せられ、寂後に於ては間もなく、

勢至菩薩の化身と崇められた程の智者が、温々迫らない風格を示して居るのは恐らく其天性であろう。全く無我の聖者である。而も一生一日として聖教を讀読しないことはなく、われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者、花洛に乱入の時、ただ一日聖教を見なかったのが唯一の例外であつたという。単に人として見ても、千載に範を坐れる人であるというべきで、其浄土教の説も、此人格と對比して解すべきである点が多々であると考えられる。」
『仏教汎論』下、三九五ページ

これは學術書であるから、勿論各宗の祖師方についても記述して居られるが、就中、先生のこの人物評は、出色のものであることを知って頂きたいのである。

以上は先生の上人に対する一般観であるが、更に忘れてならない大事なことは、上人の學問についての理解である。現に上人の相對二元論的立場は、天台の本覺思想や、親鸞、道元等の絶對一元論より一段低い立場の様に見る學者もある其の中で、上人の立場を確信を以って支持して居られるのが、わが宇井先生である。これも先生の文を引用すれば、「法然上人の立場は俗諦であつて、

この立場はよく守られて居る。……俗諦門は決して卑近であるとか、浅薄であるとか、いうべきものでなく、従って、俗諦に立つからといって、自ら卑近浅薄を掩はんとするが如き我慢的態度に出づる要は毛頭ないのである」(『仏教汎論』下、四〇八・九ページ) といって居られる。

つまり、上人独特の俗諦というのは、相對二元論の立場であるが、それは決して浅薄なものではなく、一見浅いと見えるのは、却って深いのである。それ故、先生の

一夜落花雨滿 城流水香

仙壽

——宇井伯壽書

この言葉は、もつと自信を持つ様にと、恰もわが宗門人に対する忠言とも、受取り得るのである。

俗諦というのは、現実の現象や体験から出発する立場であるから、科学的考え方でもあり、いわば、近代的思考法でもある。宇井先生は、勿論真諦は尊重して居られるが、特に俗諦の考え方を大事にして居られる。このことは、先生の大乗起信論の批判を見れば、良く解るであらう。

先生によれば起信論は、大乘の深遠な教理を組織的にまとめた、珍重すべき論書であるが、結局は、人間が頭で考えた結果の、最後の一心という理、真如から出発して個々の現象や、人間生活が現われて来る所以を説明しようとするものであって、絶対の理という、全くの思弁の所産から、現実を説明しようとするのである。だから実際に即して考えると、これは逆であり、いわば逆立ちした考え方であるという風に説いて居られる(『仏教汎論』上、五一〇ページ)。

先生は、この様に一般的抽象的な理から出発するよりも、具体的な個々人の現実から見てゆくことを重んじて居られるが、更に、先生が常にこの様な態度で仏教を見

ておられたことは、次ぎのことでも知られるのである。

従来仏教の通説たる、菩薩の五十二の階位や、三大阿僧祇劫といった様な、途方もなく高く、又永い修行の説き方も、一面の理は無いでもないが、吾々の日常生活には殆んど関係のない、無用の長物であるとさえ批評して居られる。以てその現実的学風を知るべきである。このことは、法然上人が、現世の成仏は、望ましいけれども今の時の吾等には不可能事と、聖道仏教に見切りをつけられた。偉大な現実的決断と、深く通づるものがあると思われる。

つぎに、自力他力といえ、今は普通浄土教の専用の様に考え、尋常の修行を自力とし、弥陀願力を頼むことを他力としているが、それと共に、本来仏教の一般的な自力他力の見方のあることを、自分は宇井先生から知らされた。つまり自力他力は相対的であつて、自分が生きているのも、一切他力の力で生かされていると受取ることも出来るし、又、自分の力によって生きていると解することも可能である。真如界より見れば、もとより自もなく、他もない、唯一法性の流れである。しかし又同時に、自力とも他力とも何れにも見得るといふのが、一般

仏教の、縁起に基づく見方であり、これはドグマ的でなく、一般性、客観性のある見方である。

法然上人の他力観には、浄土教的他力と同時に、一般仏教的他力の見方が、その基礎にあることを知るべきである。だから上人には、一念の自力があり、多念の他力もある。一物を同時に、他多に見ることも可能とする。

それ故上人は、一念の信と共に、また、多念の行も大切にするという風である。この様な主体的自由さ、これが、他を排せずして一宗を開き得た上人の本領であらう。

上人のこの様な態度を、原理的に表現すれば、あれもこれもこの包摂と同時に、あれかこれかの主伴選択が常に伴なっているとも言ふべきか。「一念尚生る、いわんや多念をや」の含蓄ある言葉は、理を夢みつつも、事に一層の重きをおかれた上人の、重層的考え方の好見本である。

以上のようにみてくると他の何人よりも、宇井先生を紹介して見ることに、新らしい法然像が輝き出る様に、自分には思われる。未開の沃野にも似た法然研究に、新進学徒の進出を期待したい。日暮れて途遠し、これは私自身の感懐である。

自然を考える

(四)

——医学と自然——

自然に関する断章



佐^さ竹^{たけ}隆^{りゅう}三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)

「医学と自然」というのが編集者から私に与えられたテーマであり、この場合はまごうことなく山川草木といった自然環境が医事や医療とどのようにかかちあうかを考察するように求められていると思われる。

公害により自然環境が破壊され、人間の心が次第に荒廃してゆくことは、現代のわれわれが直面している悲劇的状況であり、精神衛生の観点からもゆるがせにできない大きな問題である。豊かな自然環境の回復が叫ばれ、

新設の病院には必ずといってよいほど立派な庭園が配慮されるのは、今日もはや常識となっている。

緑は人間の心をなごやかにし、草花は目を楽しませ、自然の美しさは病人の心をなぐさめ、治癒を早める——ないしは治療効果を高めると一般に信じられている。

このこと自体を否定するつもりはないが、これとは全く正反対の事実も存在することを知っておく必要がある。

いわゆる五月病患者の場合、彼等にとって
は、さわやかな風の薫りも、輝くような緑
も、鳥の声も花の美しさも、少しもなぐさめ
にはならない。むしろ逆に、豊かな自然の生
命力が彼等の心を圧倒し、不十全感・不幸
感・絶望感・挫折感を一層際立たせるのみ
で、不安や苦悩を深刻化するだけである。

「見渡す限りものみな緑、この万緑が私の
心を苦しめる」と訴えるうつ病患者の悲痛の
声を、われわれはどのように理解し、受けと
めるべきであろうか。

大都会に住むわれわれにとって、蛙のこえ
を聴くなどという機会にはめったに恵れず、
「遠蛙」などというとのどかな田園風景を連
想し、それだけでもほのぼのとした心のぬく
もりを感じるのであるが、地方都市の大学の
学生寮に住む五月病患者である学生は、「遠
蛙のこえが天に満ちてくると、感傷的になり
涙がとまらなくなる。少年の日の悲哀がよみ
がえってきたり、望郷の念がつり、今の私

には蛙のこえを聞くのがつらい」と訴えてい
た。

美しい豊かな自然環境は、傷ついた心を和
らげ救いとなることは事実であるが、常にそ
うであるという保証はない。抑うつに閉ざさ
れた心をひらくどころか、時には逆に心の傷
を拡大したり心の痛みを増強することもあり
うる——という治療学上の現実はある。案外知られ
ていないようである。

このような絶望・悲歎・苦悩の心を和ら
げ、魂の救済を与えうるのは、自然の力を以
てしても不可能であるとしたら、あとに何が
あるであろうか。精神療法家や宗教家の活動
する領域はまさに此処にあり、われわれの使
命は重大であると思う。

自然という言葉の意味は多義的であり、前
述の「山、川、海、草木、動物、雨、風な
ど、人の作為によらずに存在するものや現

象。また、すこしも人為の加わらないこと。また、そのさま」ということの他に、「あること」が、誰にも抵抗なく受け入れられるさま。また行為・態度がわざとらしくないさま」および、「天からうけた性。物の本来の性。天性。本性」などの意義がある。

また、多く「しぜん」と「しぜんに」の形、または単独で副詞的に用いられ、物事がおのずから起るさまを表わす。このような用法では、(一)「ひとりでになるさま。おのずから」、(二)「そのうち。いずれ」、(三)「物事がうまくはかどるさま」、(四)「物事が偶然に起こるさま。ぐうぜん」、(五)「異常の事態、万一の事態の起こるさま。もし。もしかして。万一。ひょっとして」などの意義を区別する。

仏教関係では「じねん」とよむことが多く、(イ)「すこしも人為の加わらないこと。天然のままであること。仏教的立場からは否定される無因論をとく自然外道に見られるもの」(ロ)「おのずからそうであること。本来そう

であること。仏教そのものの真理を表わすものとして用いられるもの。無為自然、業道自然、自然法爾などと表現される」の二つの意義が区別されているようである。

また、中世以前では、「ひとりでに、おのずから」の意の時は「じねん」とよむことがふつうで、「万一、ひょっとしたら」の意の時は「しぜん」と読みわけていたという。

医療、とくに精神療法(心理療法)できわめて重要な意味をもつ「自然治癒」(《Spontaneous healing》)について考察してみよう。

自然治癒という事実は古くからよく知られた現象で、「ひとりでに治ること」である。その本態は不明であり、今日の高度に進歩したと思われる医学がまだ解明していない難病の一つである「精神分裂病」においてすら、自然治癒は起こりうる。なんとも不思議な、神秘的なことではあるが、「自然治癒」とは

一体何であろうか。

人間に限らず生物一般には、疾病や創傷の際には自然の復元力があり、自然に健康を回復する潜在力があると考えざるをえない。古いギリシヤの諺に、『*Natura sanat, medicus curat.*』（自然は健康にし、医術は治療する）という言葉があるが、これは治療学上きわめて重要な意味をもつと思われる。

自然治癒の場合は完全に健康に復する、つまり「完全治癒」(*Restitutio da integrum*)であるが、医学的治療の場合は多く「不完全治癒」しか望めない。かすり傷が次第にかさぶたになって完全にもとの健康な皮膚になるのは自然治癒であるが、傷の大きさや汚染による化膿如何によっては、瘢痕をのこす不完全治癒となる。

生物学・実験生理学での再生能力(例えばとかげの尾の再生)の観察、創傷治癒過程や内出血などの修復機制、伝染病病原体の毒素による侵襲と免疫体の産出といった細菌学や血清

学などの知見により、身体医学のレベルでは、自然治癒の秘密はかなり解明されてきたように思われるが、精神医学の水準での精神病・神経症・心因反応などにおける自然治癒のプロセスに関しては今日なお依然として謎であり、暗黒が支配していると言わざるをえない。

それはともかくとして、治癒現象には二つの方向——自力による自然治癒、自らの助け(*Selbsthilfe*)、つまり前述の *Natura sanat* と、他力(医療)による治癒、他からの助け(*Fremdhilfe*)、つまり前述の *Medicus curat* との二つが区別されることを正しく認識することは大切である。

臨牀精神医学の治療家としての私の使命は、患者自身に内在する自然治癒への活動性を高め、潜在する治癒への意志をひき出し、めざめさせ、安心立命の境地に一刻も早く到達できるよう援助し、激励することであると思う。仏教のしろうとである私がこのような

ことを言うのは大変おこがましいことであるかもしれないが、個人の無意識の奥底に眠っている「仏性」を自覚させること、つまり

自然と健康

一 生活環境因子と健康

人の健康に影響する生活環境因子は非常に多いが、古代の医学では、病気の原因、とくに外因として風、寒、暑、湿、さらに食、住などがあげられていた。これを自然的環境因子という。最近はこちらの因子は文化の向上とともに次第に制御されてきたが、その反面文化向上に寄与すべき生活環境が進歩過程の

「見性」ということが精神療法ないし治療的カウンセリングの神随であり、中心課題であるように思われる。



すぎたきどう
杉田暉道

(横浜市立医大助教授・医博)

ひずみによって公害という形になって現われて、むしろ人の健康を害するにいたったことは注目しなければならない。

一方世の中が進歩するに従って、人口が都市に集中するようになり、その結果過密の現象が起こり、反対に農村においては過疎という現象を生じ、そのために個人生活がおびやかされるようになった。さらに精神衛生上の大きな問題も提起されるにいたった。これら

の地域社会における人口問題、都市と農村の違い、公害等を社会的環境因子という。

今日のわれわれの健康は、前述の自然的環境因子や社会的環境因子およびその他の環境因子によって複雑に影響しあっている。

二 自然的環境因子と健康

1 気象と気候

気象の変化や気候すなわち季節が、人の健康に大きな関連を有することは古くから知られている。杣山は乳幼児の死亡について詳しく解析し、英米のそれと比較している。その結果、英米などでは日本にみられるような変動のないことを認めた。すなわち日本の乳児の死亡率は冬にきわめて高い。それは同季節の肺炎と腸炎の死亡率が高いことによる。

さらにこの現象は四歳まで続くということをも認めた。

英米ではこのような冬季死亡率の高い現象

がみられないのは、暖房の発達によるもので、日本の乳児は寒さの影響をまともに強く受けていることが推察されると杣山は結論している。

季節が小児の発育に密接な関係を有することもよく知られている。一般に春から夏にかけては長育（身長、坐高、下肢長など）が盛んで、秋から冬にかけては量育（体重・胸囲・上腕囲・腹囲）が盛んである。

2 空気と日光

新鮮な空気と日光がわれわれの健康に非常に大切なことは、今更改めていうまでもないが、最近は大気の汚染やばいじんによる紫外線不足のためにくる病が発生するようになり問題を提起している。

3 土と水

土や水の異常な化学物質による汚染が健康に種々な影響を与える。チッソ工場からの水

銀排出により、水俣病が発生したが、その患者の母から胎児性水俣病の患児が数名発生している。同様の中毒は新潟県の阿賀野川流域にも起こった。

4 地域

乳児死亡率は、青森、岩手、香川、大分、鹿児島などの県に高く、神奈川、静岡、兵庫、岡山、東京の都県に低い。また日本脳炎は昭和46年には福岡県が最高で、つぎがその他の九州各県であった。猩紅熱は東北以北の地方に多かった。これは地域によって気温が違うので、気温と関係の深いこれらの伝染病の発生にも影響をおよぼしたものと考えられる。

三 『金光明最勝王経』にみられる四季の変化と病気

『金光明最勝王経』は曇無讖によって訳され経典で、奈良時代には朝廷によってきわめ

て尊重された。この巻九に病気の治療法が詳しく述べられている。すなわち、「わたしは今古くから伝わる、あらゆる療病の方法を、次第に汝に説こう。善く聞いて衆生を救え。

一年を三カ月ずつで分けると、初めの三カ月は春時、次の三カ月を名ずけて夏となし、次の三カ月を秋分とし、最後の三カ月は冬時である。二カ月ずつで分けると、初めの二カ月を華時、次の二カ月は熱際、次の二カ月を雨際、次の二カ月を秋時といい、次の二カ月を寒時、最後の二カ月を氷雪という。このように一年間の違いを心得ていて、投薬の種類や量を間違えないようにしなくてはならない。この違いをしっかりとわきまえて、飲食を調節すれば病気にかからない。四季の推移に伴って四大(地水火風という四大要素)も変化する。この時に薬資がないと必ず病苦を生ずる。病気には四種類ある。……春には痰癰(たんいん、呼吸器系の病気)動き、夏には風病(神経系の病気)生じ、秋時には黄熱(熱性の病気)増し、

冬節には三俱ともに起こる。春は洪、熱、辛を食し、夏には膩に、熱、鹹かん、醋じやく、秋時には冷、甜、膩に、冬には酸、洪、膩に、甜と四時において服薬と飲食を違えなければ病氣にかかることはない」とある。

四 『養生訓』にみられる四季の

変化と養生

わが国において始めて健康および健康法について述べたものが『養生訓』である。これは貝原益軒（一六三〇—一七一四）によって著わされ、八巻からなっている。この第六巻に「病を慎む」という題目の項があり、ここで春、夏、秋、冬と移り変わる季節にそれぞれに即した養生をしなければいけないと説いている。

春は陽氣が発生し、冬の閉藏にかわり、人の肌膚きふが和して表氣が漸やく開くが、余寒がまだ烈しくて風寒に感じ易いからこれに注意し適度に運動をするのがよい。

夏は人の肌膚きふが大いに開くから外邪が入り易い。したがって涼風に久しくあたってはいけない。入浴後風にあたるな。食事を控え目にし、生冷を求めないように努めよ。睡眠中は扇で人におおがしてはいけない。風に当たってはいけない。夏の月は霍乱かくらん（痘瘤）、中暑、傷食しょうじき、泄瀉、瘧痢まがりの病が起こり易いから、つとも養生に注意しなくてはいけない。

秋は風邪におかされぬよう用心しなくてはいけない。表氣がまだ堅くないのに秋風がすでにきているから、感じてやぶられ易い。慎んで風涼にあたり過してはいけない。

冬はあたため過して陽氣を発しもらしてはいけない。衣服は少し暖めるのがよい。あまり暖めるのはよくない。衣服を多く重ね、又は火気で体を暖め過してはいけない。というように懇切に説いている。

五 今後の自然環境への対応について

今まで述べてきたことは、健康を保つには自然的環境をどのように克服してきたかということを歴史的に観察し、さらに自然的環境が健康にいかなる影響を及ぼすかということを見たものであった。

しかしてここに注目しなければならないのは、今日の自然的環境は従来の自然的環境と異なっており、その内容が極めて複雑化しているということである。というより、あまりにもわれわれは自然的環境に対して真向から立ち向かい過ぎているといえる。あらゆる面において人工的な素晴らしい環境をつくり、その中で生活していこうとしているのではなからうか。その為に反って人為的な新しい健康障害が発生しつつあることは周知の事実である。

これからは、自然をもう一度素直に見直し、自然の中に入って謙虚な気持ちで生活してゆく態度が是非とも必要である。

◇ "浄土句集" 欄投稿要項

七月に入りまして、夏の陽差しが厳しくなりましたが、本誌俳友の皆様はお健やかに過ごしのことを思います。

さて、ホトトギス同人の一田牛畝先生（福岡市正定寺住職）を選者にお迎えして、正月号より開設された「浄土句集」のコーナーもなかなか好評のうちに続けられています。

どうか皆様も、お仲間などにお呼びかけいただいて振るってお投句下さいませ。

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会宛

浄土句集

一田牛畝選

山口 三井 寛静
灌仏に手合す稚児のいとけなく

群馬 島津 か寿

散る花をつむりに目細め地藏尊

東京 吉田 金雄

開帳の腹帯如来伏し拝む

福岡 増谷 雄鳳

落の墓煮込みのうまき望餉かな

千葉 菅 ます

掃き了えし庭に舞ひ来し春の雪

東京 福本 たね

愛娘にかわれぬ命春寒く

東京 鈴木 葉子

蚕豆のはじけて黒き爪飛びし

夕焼の奥に浄土をしかと信 一田 牛畝

福岡 高良 慈風
天空にとどく辛夷^{こようし}を仰ぎけり
下闇に開基の墓のちんまりと

評 この寺の開基は古く、そして楠や櫟の
大樹の下闇に開山が眠っておられる。そ
の墓が小さいところに有難さがある。

福岡 江上 植村

新築の庫裡の隅まで春日さし

評 九州日光と称される名利で、庫裡はう
す暗かったが改築されて明るく、その上
春日あまねく、若い人々も喜こんで集っ
て来て、心の憩いの場とならん。

福岡 荒牧 還愚

挽ぎたての紅鮮やかな莓食む

春暁や鶯張りの知恩院

福岡 筑場 不遠

十字架の墓ある寺の花御堂

東京 田中 秀代

東京 阪入志津枝

花の中楊貴妃観音笑み給ふ

福岡 原 敬二郎

山形 松田 允子

サーピスに植えて呉れたる苗売女

ふるさと紀行

駿府・今昔ものがたり



かわ 村 ゆう ほ
川 村 悠 穂

(静岡市西福寺住職)

「静岡にお住いですか、良い所ですな!! 富士山が見えますでしょう。」ほんとに、ほんと、有難いことです。

四十年前、廻りに山の見えない東京の真中から来た当時は、緑の山々を身近かに見て、この山々をずーっと歩いてみたいと思いました。が、好事魔多しといいますが、十五年の静岡大火、二十年の戦災と二度の災害で、ガツクリきてしまい、寺の復興だけに専念することになってしまいました。然し町の様相はすっかり変わってしまいました。したが、山や川は、時代の波を受けながらも、夏は夏、冬は冬と、四季おりおりの姿を見せてくれています。夏に東海道本線、或は新幹線で、富士山を見ようと期待しながら窓際より外を見ている人は、がっかりする人が多いようです。それは、夏には雲が多く殆ど山が見えないからです。然し、冬には雪を頂いた富士山が、青い空にすっきりと浮び上っているのがよく見えます。

徳川家康が晩年の十年間をすごし、元和二年四月十七日に七十五歳で歿って久能山に葬られたということは、静岡の地名の如く、四季共に大へん静かな所であったからでありましょう。今の静岡市では、殆ど雪を見ることがありません。もっとも静岡の名の起りは、明治二年六



—静岡市から望む富士山—

月十七日に徳川家達が藩知事に命ぜられたので、藩の重役達は、駿河府中の名を何とか改めたいと相談して、一旦「賤ヶ丘」ときまりかけたところ、藩学校の頭取、向山黄村が「賤機山の麓だから賤の字を用いるのは智恵が無さすぎる、しづのひびきがよいというならば、静岡が岡」「静岡」とする方がよい、新しい政府もとのい、世の中も静まり、おだやかになったから「静岡」がよからう」といったので、一同が成程と手を打って静岡にきまつたということです。

昔の駿府城の跡は、私が来た頃は、歩兵第三十四連隊の兵営がありました。今は駿府公園になっており、その中央には、家康公の銅像とお手植の種のある紀州蜜柑の老樹があります。三七〇年前のものであり、県下で一番古い蜜柑の木といわれております。

蜜柑といえば、静岡は、お茶どころであります。駿河国の三国師といわれる方に、聖一国師・大応国師・白隠禅師の三人がおりますが、その中の聖一国師は、安倍郡大川村の米沢家の生れで、長じて中国に渡り、七年の留学を経て帰国された時に、茶の実を持って帰ったのを、美和村足久保という所に植えたのが始まりということとで

す。この足久保に、この程、新光明寺さんが駅前より移転され、五千坪の境内に、立派な本堂、庫裡を建立され、この五月五日に、岸門主親下、稲岡宗務総長を迎え落慶法要を勤められました。

お茶といえば「わさび」が、また有名ですが、私の寺の近くに、今でも「田丸屋」というのがあります。この初代・和助という人が、宝暦の頃、新通りで味噌屋をしていて、或る時、山家に行ったとき、その農家で山葵の茎と葉を味噌汁に漬けたものをお茶受けに出した。食べてみると棄て難い風味があったので、茎と葉を持ち帰り、いろいろ加工している中に、酒粕に漬けるのが一番よいことを発見し、売り出して見たが需要は知れたもので「これは江戸に出し宣伝するほかない」と思いついて、家の者とは水盃をして清水から船で江戸に行き、浅草の繁華な道で、通る人を呼び止めて試食させながら売り扱めたというのが評判になったということですが、今は、田丸屋・小泉楼の山葵漬が駅売りに出て、全国に知られるようになりました。

お寺は、静岡県としても、静岡市としても、曹洞宗、臨済宗が多いのですが、旧静岡市は、お城を中心として

浄土宗寺院が多いのは、家康の先祖の菩提所が岡崎の大樹寺であり、その大樹寺で命びろいをし、厭離穢土・欣求浄土の旗印のもと、お念仏を心の支えとして、天下を統一したことにもよることであり、西福寺が出来たのもこれに原因します。

三州岡崎の城主・徳川家康は、幼時八歳の松平竹千代と称していた時から、今川義元に人質として預けられ、今でも静岡大岩の臨済寺に竹千代のいたという室が残っています。十九歳になり、松平元康と名のり、三河の大高城を守っていた時に、桶狭間で今川義元は織田信長の急襲で亡びましたが、その時、大樹寺に逃げこんだ家康は、そこに足を止めていた五十人力といわれた了伝和尚が、門の貫木を振り敵を追い払ったことにより、救われましたが、この了伝和尚が西福寺の開山となっていました。この貫木は大樹寺に御神木としてまつられています。

了伝和尚はその後、元龜三年十二月浜松の犀ヶ崖で、家康が亡ぼした武田方の亡霊により、諸人が難儀しているのを、家康の請により、浜松（今の名残町）に出向いて、僧俗の人々を集めて七日間の別時念仏を修行し、そ

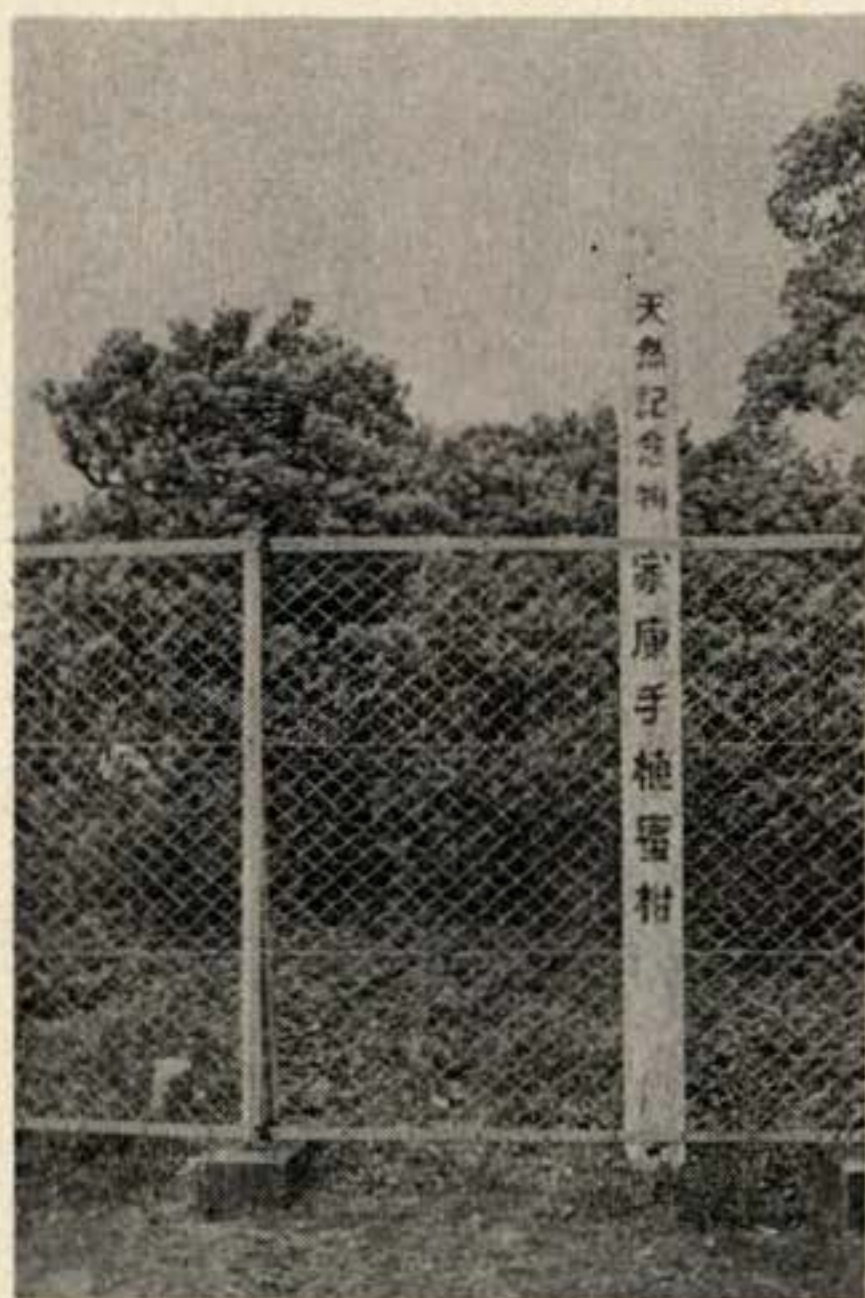
の難儀を救ったということとは「江戸名所図絵」などにも、家康が了伝の法力を「武夫の勲功に等しい」として賞揚したと述べている位だから大したものであつたのでしよう。現在、犀ヶ崖には宗円堂があり、郷土芸能化している「遠州大念仏踊り」の中心となっていますが、宗円なる僧は、この別時念仏会に参加した僧なるべしといわれております。お盆になると、初盆の家々を今でも大念仏の人々が廻っています。

そこで、家康はその功により一時を建立し「松平西福



—駿河城本丸跡と徳川家康像—

寺」として、了伝和尚の安住の寺としました。寺号に松平の称号がついたのは、徳川家の親族関係を結ぶ無上の榮譽であつたのであります。その後、慶長十年四月家康が將軍職を二代秀忠に譲って、自分は駿府に隠居していましたが、同十三年秀忠が、駿府に家康を訪問した時、家康は秀忠將軍に、「了伝和尚のために、江戸に駿府の西福寺を移築してやってくれ」と命ぜられたので、秀忠は、この命を拝して江戸に帰ると、早速に命を下して、駿河台下に一寺院を建立して、駿府と同じく、東光



—家康手植蜜柑(天然記念物)—

山良雲院松平西福寺と称しました。山号の東光山は「松平西福寺譜」に、慶長十三戌申年、於駿府「東国光照」之自筆を頂戴す、御他界後、東照宮の御神号と符合すとあります。家康が他界する時、葬式は江戸の増上寺で、位牌は岡崎の大樹寺にまつり、遺骸は駿府の久能山に葬るという遺言であったということです。大樹寺の位牌には、

東照大権現安国院殿正一位大相国公一品徳蓮社崇譽道和大居士

となっております。

神号をどうするかという問題になった時、四つの候補が出たということです。

一、日本大権現 二、威靈大権現 三、東光大権現

四、東照大権現

ということでしたが、寺の方に「東国光照」の中から東光の字がとられているから、神号もこの中からということとで、東照宮、東照大権現ということになったといいます。ちなみに、了伝和尚の法名は、東京・浅草蔵前の松平西福寺の墓石には、

真蓮社貞譽上人素道房願故了伝大和尚

と記されておりますが、一般には祖洞という字が使われているようです。

神田駿河台に建った松平西福寺は外様大名の参勤交代制が布かれ、その邸宅が出来るため、現在の蔵前に移転しました。「江戸名所図絵」には、「江戸浄土宗四ヶ寺」、

一、(芝)増上寺 二、(小石川)伝通院 三、(深川)靈巖寺 四、(蔵前)松平西福寺

の随一にして本尊阿弥陀如来は安阿弥陀とありますが、江戸の振袖の火事等打続く災害で現在は昔の面影はありません。静岡の西福寺は、その後、駿府城代・松平大隅守等によって護持されてきましたが、現在は地方の一小寺院となっております。

さて、静岡市には、二代將軍秀忠公の生母である家康の側室・西郷の局を葬った宝台院があり、昭和十五年静岡大火焼失以前の本堂、大方丈、客殿、宝台院殿の靈廟は中々立派であり、なかでも家康の持仏であったという白本尊といわれる阿弥陀如来は重要文化財であり、焼失はまぬかれています。

日吉町には、家康の外祖母である、お留の方、華陽院殿が葬られている華陽院があります。その他、来迎院・

玄忠寺・報土寺等々家康によって創建されたり、再建されたり、或は浄土宗に改宗した寺々があります。

明治二十四年、総本山知恩院が財政的に窮迫し、三門が抵当に入り、外国人の手に渡ろうとした時、西福寺の隣寺善然寺の先代、鈴木弁順上人がそれを知り、檀徒総代の渡辺伝八氏に話した所、当時の金にして金壺百円也を知恩院に寄附したので、三門が助かったということを知る人は少ないことと思います。



— 松平西福寺本堂内部 —

(こ)(ば)(な)(し)

乞食の身なれば

京の都にたむろする乞食たちが暑い夏の夕すずみに、「今来ん盂蘭盆を、そちどもはいずくにて送らんや。ちと処をかへ、堺の津に行き、仕舞をせんは如何に」——今度の盂蘭盆には君たちはどこで過すつもりなのか、どうだ、場所をかえて堺の港に行き、身じまいを致そうと思うがどうであろう、などといささか気取った調子でその趣くところをいう。五、六人の仲間も、「もつとも」などと体よく答える。そこで連れ立って堺に来てみると、

ここに到ればその寺の乞食あり、かしこにおもむけば、その所にもらひつけたる乞食あり。施餓鬼につけ、靈前の供につけ、一飯も京の乞食の所得なし。(角川文庫本『醒睡笑』下巻、八四ページ)

ということであった。つまり、寺々の盆施餓鬼の供物は、すでに堺の町の乞食たちに占領されていて、都の乞食たちは、すごすごと京に引き上げ、堺ですっかり乞食になってしまった、と慨嘆したという。人の望むことなどは、およそ各人相応にして程度は知れたもの。これは往時の盂蘭盆、施餓鬼行事の一エピソード。

(H)



幼児の宗教的情操教育について

——とくに思いやりの心を育てる保育を通して——

やす い あき お
安 井 昭 雄

(東京・光明幼稚園副園長)

一、はじめに

寺院の経営する個人立、宗法立の幼稚園・保育所が近年、学法化、社福化の促進を指導され、大きな問題になっていることはご存知の方も多いと思う。とくにその中で問題になることの一つは、宗教的情操教育が行なわれにくくなってきたことである。現に、保育所には厚生省側の意見として、「措置児が対象であるから、国民的な行事ならともかく、日常の礼拝や宗教的な保育活動は好ましくないと思います」という言葉まで出ているのである。他方、比較的自由に私学の独自性、建学の精神を

打ち出せる幼稚園ではどうかというと、なかなか思うように行なわれていないところが少なくないのではなからうか。

宗教的情操教育は宗派教育そのものではないし、儀礼的な行為を教えるだけのものでもない。もっと範囲の広いものであって、普通の人間なら誰れでももちうる情操である。私ども保育者としては子どものうちからぜひ伸ばしたいと願うものなのである。

二、実践のなかから

幼稚園・保育所において宗教的情操教育が困難である

と思われるのには、大きく分けて二つの面からいえると思う。一つは、保育を受けるものが幼児であるということ。もう一つは、保育者の側の問題で、宗教的情操の意義が保育者によく理解されていないということである。

前者の、幼児に対する保育の困難さは実際現場に立ってみると、誰れでもがまず感ずるであろう。宗教的情操教育ならばなおさらである。しかし、できるだけ基本的な、やさしい表現や擬人法などをつかい、折りにふれて繰り返す努力を保育者が怠らなければ、幼児といえどもかなり理解できるのである。年長児(五・六歳)になれば反応があるので保育の効果も期待できよう。その点、年少、年中児(四歳未満)には年長児ほど期待はできないようである。これを充分な効果をあげるには家庭での保護者による協力が必要である。

家庭での保護者、とくに母親の考え方が大きな影響力をもっていることはもちろんであるが、父親や祖父母の感化も見逃がすことはできない。宗教的情操教育も家庭内で統一した教育方針が見られるところでは、幼児はわりとスムーズに保護者の言葉を信ずるものであるが、そのような家庭ばかりとはいえないのが実情である。その

点でも保護者のための宗教的情操教育が必要になる。

保育者にしても保護者にとっても、幼児に宗教的情操教育をするばあい、いろいろな内容と方法があるが、なかでも基本的で、しかも理解しやすく、社会性を養う意味でも大切なことは、「他者への優しい思いやり・いたわり(慈悲)」とそれにもとづく実践」といえよう。この他者の中には単に乳幼児のみでなく、他の人あるいは小さな生き物に至るまで含まれる。したがって、園ではもちろんのこと、家庭でも出来るだけ、小動物(家畜類から昆虫類にいたるまで)を飼育するようにしてほしい。そのばあい幼児と一緒に小動物に対して優しく話しかけをするとよい。

そして飼育をすれば必ず「死」が伴なうものであり、この死のとり扱い方も宗教的情操教育の大切な場となる。紙にくるんでゴミ箱へ入れるか、お墓をつくるか、という行動の違い一つとっても幼児に与える感化に異なるものが出てこよう。

このように対象が小動物ばかりでなく、草、花、石などを含まれたり、また人間としたばあいでも、宗教的情操教育に結びつく場面はいたるところにある。親の我が

子に対する愛情はふつう誰れでももっているものであるが、この愛情を他者に少しでも広げる努力をすることが大切である。自己の出来る範囲から始めることである。たとえば保護者とおしの交流の中で、日常考えている問題などを話し、考え、助け合ったりして、孤独な悩み（たとえば育児ノイローゼなど）から少しでも解放されるようなグループづくりをすることはよいと思う。つまり縁づくりである。いろいろな人のさまざまな考えを知ることは自分をみつめ反省し、自己形成していく上で大切なことだと思う。

三、最近の事例から

ここで拙園でのささやかな実例をあげておきたい。それは心身に障害のある子どもを入園させたことによって本人はもちろんのこと普通児とその保護者さらに障害児の保護者にもよい影響を与えていることである。障害児を受け入れるにはそれなりの条件と準備が必要であり、いつでもどここの園でも出来るというものではないが、それでも宗教的情操教育からみて、第一によいことは、普通児が障害児の世話をよくすることであり、障害児の心

も開けて明るくなってくることである。

第二に、保護者にとっても、五体満足な自分はどうであらうか、という見詰め直しをする機会をいたいたいな障害児が与えてくれるということ、また、同じ子どもをもつ親として他人ごととは思えないという反省の機会を与えてくれること、このことはとてもよいことと思う。なぜなら、障害児はどんな親にでも出生する可能性があるものであつて、決して他人ごととしてすますことはできないのである。

私共の知っている範囲でも早くから障害児を扱っておられる園も多いし、ここで別に特記するほどのことではないかもしれないが、拙園にとっては初めてのことなのである。一昨年は自閉症児、今年は盲児の保育をする機会に恵まれた。ともに保護者から依頼を受けたとき、非常に不安を伴ったが、保護者には「可能なかぎりの保育をするが、よい効果があらわれるかどうかは保証できかねる。それをご承知いただいた上でなら」という条件つきでお引き受けしたわけである。前者の自閉症児はごくわずかずつであるがよくなっていた面がみられた。後者の盲児のばあいは今の段階では成功している、とい

えよう。つまり、普通児のもついたわりの心をさらに育んだことと、障害児とその保護者が非常に喜んで下さった、ということである。また、目は見えないけれど、予想するよりいろいろなことができる様子は普通児にとつてまさに驚くべき出来ごとである。「五体満足で目も見える自分はもつ」といろいろなことができてよいはずだ」と幼児ながらに思うであろう。保護者が口をすっぱくして子どもをしつけるよりよほど効果があり、しかも「いたわりの心」も育てられていくのである。障害児の側にとつても、普通児といっしょにいろいろなことが出来る、仲間なのだ、という喜びの実感を味わうことができるのである。

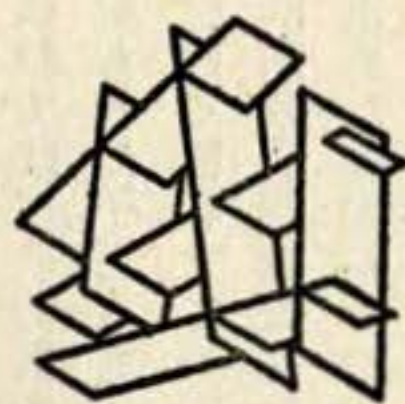
仏教では、一切衆生悉有仏性というが、このような障害をもった子どもも、仏性をもち、普通児と同じに保育を受ける権利をもっているものであり、これを保障することとは宗教的情操教育を旗印にする宗教（仏教）保育にとって重要な課題の一つである。まして浄土宗では信仰の基礎を凡夫の自覚に置いていることから考えてみて、障害児が普通児とどれだけ本質的な差があるというのであるか。どちらもこの世で生きる同じ人間として、同じ幼

なきものとして、ともに生きることを考え合い、実行していくことが大切なことなのである。

四、おわりに

保育者に対する宗教的情操教育についてひとこと。保育はまさに保育者次第である。したがって保育者の宗教的情操が幼児に与える影響は大きいものである。保育者のための宗教的情操教育には特別の内容や方法があるわけではなく、幼児や保護者に対するばあいと本質的には少しも異ならない。なぜなら、保育する心、育ての心こそが宗教的情操の一つのあらわれだと思ふからである。保育が保育者にとって単に生活の糧であるとししか考えられないならば、話はより根本にまで逆らなければならぬが、乳幼児の世話や保育をすることに喜び、生きがいを感じる保育者であれば、その暖かい思いやりの心を基礎として、そこから「いつでも、どこでも誰にでも」敷衍するように努めることである。他者を育てることが、凡夫である自らを少しでも育てることになるのであり、これが保育者自身の形成している宗教的情操の一つのあらわれだと思ふのである。

宇都宮一族のこと〔三〕



梶村 昇 かじむらのぼる

(亜細亜大学教授)

(二) 宇都宮の朝業こと

宇都宮頼綱の弟に朝業ともなりという人がいる。嘉祿の法難(一二二七)のときの警固の人々の中に、「宇都宮弥三郎蓮生」とともに、「塩屋しおのやの入道信生しんじょう」という名がみえるが、この人が宇都宮朝業である。朝業は、下野の塩谷に所領をもっていた。塩谷とは、今の栃木県塩谷郡一帯のことである。有名な塩原温泉、五十里湖いかりこ、湯西川地方である。「塩屋」とあるのは、「塩谷」の誤りともいえない。かつては塩屋と書かれたこともあったようだ。

朝綱のあと、頼綱が宇都宮宗家を継ぎ、弟の朝業は塩谷領を創始した。彼もまたよく和歌をつくり、鎌倉幕府に出仕し、三代將軍実朝の近くに侍し、和歌を通して実朝の信頼を得ていた。

『吾妻鏡』は、建暦二年二月一日の条に、二人の間柄を次のような挿話で記している。この日早朝、実朝は、和田朝盛を使とし、梅花一枝を朝業にとどけさせた。「名のらずば誰にか見せん」とだけ言って、返事を聞かずに帰るように命じた。朝業は、すぐにそれが実朝から贈られたものとわかり、一首の和歌を奉った。

うれしさも匂も袖に余りけり

我がため折れる梅の初花

これが『新和歌集』には、二人の贈答和歌として次のように載っている。

鎌倉右大臣家より梅を折りて賜ふとて

君ならでたれにか見せむ我が宿の

軒ばに匂ふ梅の初花

この歌に対する「御返事」として、朝業の前の歌が載っている。『新和歌集』というのは、宇都宮一族およびその周辺の僧侶などの歌を中心に集めた歌集であり、いわゆる「宇都宮歌壇」として、京都、鎌倉につぐ地方文化グループの存在を示すものである。『金槐和歌集』（岩波文庫）には、実朝のこの歌は載っていない。『金槐和歌集』といえは、

もののふの矢なみつくろふ小手の上に

霰たばしる那須の篠原

という歌が思い出される。那須野ヶ原は、朝業の塩谷領の隣りである。頼朝はたびたび那須野ヶ原の遊獵をしている。小山朝政、宇都宮頼綱、八田知家などという下野の御家人たちは、千人もの勢子^{せこ}を提供していることが『吾妻鏡』に記されている。実朝がいつこの歌を詠んだかわからないが、朝業もその時供奉^{ぐぶら}していたのではないか、という気がする。

この実朝が、建保七年（一二二九）正月二十七日、二十八歳を最期に、別当分曉の手にかかって殺された。このとき朝業は、供奉の一人として列に加わっていた。彼にとって、その衝撃がいかに強いものであったかは、その後の彼の行動が示している。彼は従者を連れて塩谷へ帰り、母なき幼子たちとの絆を断ち切って京にのぼり、出家してしまうのである。彼の歌集に『信生法師集^{しんじょう}』というのがある。書陵部に所蔵されているが、今度、『和家集大成』（第四巻・中世Ⅱ、明治書院）に加えられて出版された。それによると、このとき彼は次のように書いてい

る。その心境は、かなしくもあわれである。

大臣殿の御事によりて、よをすて侍らんとおもひ侍しころ、母もなくていとけなきことも、みすてかたく侍しかは氏のやしろによみてたてまつり侍けり

あはれみよわれもあらしになりぬへし

ははちりはてしりの木の本

彼の歌の癖か、当時の風潮か、彼の歌には縁語や掛詞が多く、直截簡明にその心境が伝わってこない恨みがあるが、それでも、母を失った幼子を、今また捨てていこうとする父親のかなしみと迷いが痛いほど迫ってくるものがある。この歌の次に、また長い詞書のある歌がある。

すてにおもひたち侍し比、そのけしきやみえ侍けん、つかひ侍物ともの、いかにせんといひあへるを聞て、八になる女こ、七になるをのこ、母のなきたにわひしきに、父さへ打すててなくはいかにせんなんといひて、持仏堂のうちにいととい入

て、仏に、父ととめ給へと申けるを、つきて侍るものの、いつちそと求め侍ける程に、持仏堂のうちに人けしきの侍けるをきき侍つれば、おさなき物共、仏に申ことはかなふなれば、父か我をすててゆく、とどめ給へと申こととてなけき侍、と申をききしに、何となくあはれに心ほそくおもえ侍しかは

のかれよと人をすすむる仏まで

このおもひにやおもひかぬらん

父が出家をしてしまいうらしいというので、八歳の女の子と、七歳の男の子が、持仏堂へ入って、仏に、母のいなかだけでもさみしいのに、この上、父まで私たちを捨てようとなさっている。仏さま父をとめてくださいと願っているということを聞いて「あはれに心ほそくおぼえたというのである。しかし、こうした思いをも断ち切つて、朝業は世を捨ててしまふのである。

朝業が世を捨てたのは、実朝の亡くなった建保七年

(二二一九)であるから、すでに法然上人が亡くなってから七年の歳月が経っている。京都へのぼった朝業は、兄頼綱入道蓮生のいる京の西山証空の門に入ったようである。それは次の歌から察せられる。

大臣殿の御事によりて、おなしく大臣殿したるした人の本へ、西山にともにいほりをむすへかしと申とて

もろともに西の山路におもひいれ
か□りし月のあとをしたはば

鎌倉武士で念仏に帰依した人は多くいる。たしかに武士は、戦場でいのちのやりとりをするのであるから、仏教でいえば、「悪業ふかき身」であるに相違ない。しかし、こんなことをいうと、今の平和主義者に叱られるかも知れないが、戦いはいのちのやりとりの場なのである。それは人の世のかなしいさだめとしか言いようがない。深いやりきれないような悲しみはあるとしても、「武士の

ならい」というような言い訳もたち、救いにはならないけれども逃れる場にはなる。法然上人にも、そのようなことばがある。同じ坂東の武者であった甘糟太郎忠綱が、勅命を受けて戦場に赴くとき、上人の門を叩き教えを乞うた。上人は、それに答えて、

弓箭きゅうせんの家に生れたる人、たとひ戦場に命を失ふとも、
念仏して終らば、本願に答へて来迎に預り往生を遂とん
こと、ゆめゆめ疑ふべからず

と述べているのがそれである。しかし、その武士たちが、立身出世や、所領や、名誉欲や、はては寵愛の深さなどのことで、互いに疑い、傷つけあい、陥しあったりしたのでは、人間のみにくさ以外の何ものでもなく、もはや何とも救いようのないことになる。鎌倉武士で念仏に帰依した人々の中には、こうした人の世のきたなさに愛想をつかした人の方が多かったのではないだろうか。直実にしても、頼綱にしても、この朝業にしても、みんなそうである。

朝業は京にいること六年、元仁二年(一二二五)の二月

十日、京都を出発して東海道を鎌倉に向かった。「うきことたつねこぬいはほのなかもなく」と『信生法師集』は書き始めている。証空のもとにいたか、頼綱のもとにいたか知らないが、彼のいた「いはほ」の中にまで「憂きこと」がおそってきたのであろう。その「うきこと」とは、猜疑にみちた、名利功業のことをいうのであるう。

「相坂のせき」を越え、「小野の宿」にとまる。彼はこう書いている。「貪着追及の故を以て、現に衆苦を受け、後に地獄餓鬼畜生の報を受く、このことはさらにうたかふへからす」と。「貪着追及の故」ということばが、はつきりとこのことを示しているような気がする。しかし、それは、自分だけはきれいだ、などと言っているのではない。自分をも含めて、人の世のきたなさに生きる悲しみを言っているのである。また彼はこう書いている。

又三途のふるさとに帰て、諸の苦をうけん時、天にあふひて悲しひ、地にふして歎とも、たれかたすくる人あらん、必ず俗念をのかれよとの給はす、智恵か

らさはならすは、むへしともあらず、汗穢不浄を論せず、時処諸様をゑらはす、只常に名号をとなへて極楽をねかは、かならずむまるへき弥陀の御ちかひにあへり、なかく三界火宅をのかれ、化樂不退の国にうまれて、長時永劫に無為のたのしみをうけんこと、只罪惡生死の我等か為也けんとおもひつゝくるに、よろこひの泪そてをうるほし、人界の思出此時にあり

彼の浄土信仰をもつとも端的に示している箇所である。言葉は浄土教の常套語に過ぎないが、要はその言葉をどれだけ切実に感じていたかである。現代人は、「三界火宅」といっても、少しも「火宅」とは感じていないのであろう。三界に安住して真に常住なるものを見失ってしまっているからである。

信生はこうして旅を続け、二月二十九日、鎌倉に着いた。

月かけも春もむかしの春なから

もとの身ならてぬるる袖かな

宇都宮朝業が信生法師と変ったのは、彼にとって決して「世を渡る橋」ではなかったのである。それは「再生の橋」であつたといつてよいであらう。信生はまもなく鎌倉をたつて、善光寺を訪ね、をばすて山の辺で、旧知伊賀式部光家を訪れ、しばらく善光寺に留まり、再び鎌倉にもどつてみると、七月十一日に亡くなつた尼將軍政子の喪の風景に出あう。

政子といへば、法然上人に「鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事」という長文の手紙が残されている。いうまでもなく、これは尼將軍政子への手紙である。『四十八巻伝』（卷二十五）には、「勸化上都にさかりにして、道德辺鄙にをよびしかば、鎌倉の二品禪尼、金剛戒帰依もともふかくして、蓮上房尊覺をつかひとして、念仏往生の事たづね申されたりければ」として、この手紙が略抄して載せられている。ところが内容をみると、念仏の功德は説き尽しがたいこと、有智と無智とを選ばないこと、

誹謗に妨げられないこと、異解者にも結縁させること、仏像新彫・堂塔創建等も勧めること、この世のいのりのこと、一切の善根を摂めること、異解異学の者もあなどらないこと、等が項目にわけて説明してあつて、どちらかというとな専修念仏の疑問に答える弁明文のようなものである。専修念仏は、鎌倉幕府によつて禁断の令をだされたことがある。津戸^{つと}三郎はそのために幕府に召換されたことがある。そのとき、三郎はさつそく下人を法然上人のもとに遣わして、対策の教示を願つてゐる。それに対し、上人は、「なじかはくはしき事をば申させ給ふべき」、詳しいことは申すな、もし先方がどのような事かと尋ねてきたならば、法門の詳しいことは存じません、法然上人が念仏すれば救われると申されたから、自分はそれを信じて念仏しているのだ、と申したらよい、と答えている。この政子宛の手紙は、このことに関連のあるもののように思われてならない。政子が専修念仏の信者であつたとは思われないのである。信生法師も、無常の思いにはかられたとはいいいながら、さしておどろくこともなく、

常ならぬよを夢とのみみる／＼も

さてもおとろくことのなきかな

と詠い、「かまくらにもいつとなう侍るへきやうもなければ、故郷のかたへ修行し侍る」と言つて、久しぶりに故郷の下野国塩谷の館を訪ねるのである。

故郷に帰ってみると、あたかも亡妻の十三年忌であつた。侍ちわびていた二人の子が、京都へ行かないでくれ、と泣いてすがるのを見て、「さすがにあはれにおぼえ」るのであるが、「流転三界中のことはりをわするべきにもあらず」と、

今更にこの名儀をやなけかまし

つゐのわかれをおもはさりせは

の歌を最後に、再び人知れず旅にでてしまうのである。

信生法師の歌日記は、ここで終っている。彼のその後の生涯は知る由もない。ただ、先の嘉禄の法難での警固の武士の中に、彼がいたとすれば、彼はこの足で再び京都へ向つたのであろう。『信生法師集』は、歌日記から

始まるのであるが、その歌は四十六首で終っている。そしてそのあとに百六十二首の単独の歌が集められているが、いずれも歌日記以前の作と思われるので、やはり「今更にこの名残をや」の歌が、彼がわれわれに残した最後の歌といえよう。

兄の頼綱には、出家しても文化人蓮生として世俗を渡り切るしぶとさ、といつて悪ければ、たくましさを感じさせられるのであるが、弟の朝業には、出家前における実朝との歌の出会いといい、実朝の死による出家後の信生の生涯といい、悲しいまでにあわれを感じさせられるものがある。

(つづく)

＝新刊＝

梶村 昇 著

『法然のことば』（宗祖のことばシリーズ④）

B6判 二三四頁（カルチャーブックス）

定価 八〇〇円

（発売元）

〒102 東京都千代田区富士見二一六―九

雄山閣出版株式会社

念佛ひじり三國志

(二)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

「唐の古書に、こんな話がある」

と、成覚房幸西は語りだした。

夜更けの道を比叡へ登ってゆく。若い堂僧の親鸞は聞き耳を立てた。

「洛陽の都に平等寺という寺があったそう。門外に二丈八尺もある金色の大仏像が造られた。西域の国から流

入した異族の仏徒たちの手になるものだった。何という仏菩薩なのか、当時の人は誰も知らなんだ」

幸西が口にした「当時」とは、孝昌年間、中間が南北朝に分権し、洛陽は梁の武帝に支配された時期を指したにちがいない。

その孝昌三年(五二七)の冬、突然金色の大仏像の顔がゆがんで見えた。いかにも悲しげな表情だった。よく観察すると、瑠璃色の両眼には一杯涙を浮かべているではないか。

＜洛陽の街の賑わい＞



前号のあらすじ

法本房行空に連れられて、東山の禪室に着いたのは、はや日も暮れようとする頃であった。禪室からは称名念仏の唱和が流れている。行空はその中に入って念仏を唱えようとはしない。成覚房幸西は行空とともに日課念仏の終るのを待った。唱和がたえ、ひとりの老ひじりが待者にささえられながら縁先へと現われた。その老ひじりが法然上人であることを、行空の言葉が知らせた。傍らの待者は参入して間もないはずの聖光房弁長であった。

交した言葉こそ少なかったが、幸西は法然上人に現身の菩薩の姿を見たおもいであった。行空とも別れ、京の街を彷徨しながら、幸西は感動に身を任せていた。行空といくと、この感動が腐蝕されるように思えた。貴重な出会いを大切にしようとしている幸西に、もうひとつの出会いがあった。

「仏像が涙を……」

親鸞は、ぎょっとなつて立ちすくむ。幸西も足を停め、二歩三步先の高い地点からこの後輩を凝視した。

「洛陽の人々は、この金色像の下へ連日集ってきて、不思議そうに眺めた。仏が泣いている。これはいったいどうしたことであろうか。言い合ふけれど、その意味がわからない」

涙だけではなかった。やがて大仏像の金色の肌が、べ

とりと汗で濡れてきたのである。

そこへ一人の西域僧が通りかかると、膝まづいて、くり返し同じ誦文を唱えた。百歳を遙かに越えたペルシャ人の老修行者であった。

「どんな誦文を？」

親鸞は訊く。

「ナモウ、としか漢人にはわからなかったそうだ」

「ナモウ……」

「ナモウアミトーフ」

「ナモウアミトーフ」

「南無阿弥陀仏だったのだ」

「洛陽伽藍記」という中国の古書は、この異国僧を菩提達磨だったと紹介する。禪宗の鼻祖である。果たして、中国大陆で最初に「南無阿弥陀仏」を口称した人がダルマであったかどうか、裏付ける資料はない。金色の阿弥陀仏を目撃し、ダルマはただ西域の宗儀にのっとりて礼拝したものであろう。

しかし、洛陽の人々にはこの風景、誦文が強烈に印象づけられたことだけは間違いない。

唐の善導も、その著書「観経疏」で南無阿弥陀仏は西

国の言葉だ、と明記している。これを漢語に翻訳すれば帰命無量寿如来になる、という。

「金色の仏像は阿弥陀仏だったんですね」

親鸞は再び追問した。

「そうらしい」

「なぜ、涙なんかを流したんでしょう。身体に汗なんかを掻いたんでしょうか」

「悲しんで下さったのじゃよ。わしら人間の哀れな生きさま、はかない運命を、共に泣いて下さったのじゃよ」

「おお……」

「阿弥陀仏はな、わしら浅ましき凡夫と苦しみを共に分かち合うために、涙を流し、お身体に一杯汗を掻いて下さった」

「そ、そんな仏がいらっしゃるんでしょうか」

親鸞は奇異な眼をみはるばかりだ。

親鸞自身が現在仕える常行三昧堂、その本尊仏は阿弥陀如来であった。

すでに二十年近く仕えて、明け暮れ拝しているのだが、神秘と威厳に満ちてこそおれ、自分と同じ地上に降り立ってきて共に泣いたり、汗を掻いてくれることはな

かった。少くとも師僧、先輩の誰一人として教えてはくれなかった。

「愛なのだ。阿弥陀仏は限りない愛情を、わしら凡夫にふりそそいで下さる。だからわしらも身一杯の愛をこめて、この仏におすがりするのだ」

成覚房幸西は大胆にも「愛」という言葉を聞いた。宗教にとってこれは禁句にもひとしい言葉だったはずだ。まして聖なる仏と邪悪な人間とが愛情の関係を結ぼうなんて。

若い親鸞は、近ごろのわが身をかえりみないわけにはいかなかった。比叡にこもって二十年近く、一日もたゆまず修行に励んできたが、いっこうに証果は得られなかった。それどころか、ふとかりそめの下山でめぐり遇った女人と深く契ってしまった。一子までもうけたのである。

愛慾の渦は、修行中の親鸞の身を焼いた。阿弥陀仏に眼をそむけ、比叡を脱出して母と子のもとへ出かける。しかし、里に降りれば降りるで山上が気になった。今夜のように妻子のかたわらを滑り出て比叡へ帰ってゆく。矛盾、救い難き迷い。

親鸞は煩惱に焼かれたわが身を呪う。何と邪悪な男なのか。

救いを求めて常行三昧堂に鎮座する阿弥陀如来をふり仰ぐが、その面貌はいよいよ冷めたかった。仏との間に涯てしない距離がひろがるのだった。

「愚僧のような罪深い者にも、阿弥陀仏は涙を流して下さるのでしょうか」

成覚房幸西は優さしい視線を若い堂僧へあてた。

「おぬしのような罪深い者にも、じゃとな。阿弥陀仏はな、下品下生、最も罪業深い者こそまっ先に救わねばならぬとおっしゃっている」

幸西と親鸞は再び山道を登りはじめた。四明の山頂は近い。その彼方の空が白みかけていた。

「阿弥陀仏と愛情で結ばれるその異域の教えが、どうして唐の国へひろまったのでしょうか」

親鸞は貪慾に何でも知りたがった。

「西域から念仏信仰がはいったのは、かなり古いはずだが、洛陽の人々がナモウアミトーフの口称を聞いてびっくりしたように、なかなか漢土の中軸へは浸透しなかったらしい」

ごく一部の地域、西域との国境に近い山西省にとどまった、と幸西は説明する。

浄土の祖師と呼ばれた曇鸞も道綽も、また慧遠もすべて山西省の出身であった。そこへ中原の人、善導が現れた。純粋な漢人で異域の血は一滴も混じっていなかった。善導は全面的に念仏思想を受容し、これを唐の全土へひろめたのである。

唐、というのは山西の地を呼ぶ言葉で、此処で長年にわたって北辺の鎮護にあたった軍閥が中東へ乗りこんできて覇をとるようになったのが唐王朝であった。

学問、ないしは呪術として中国人にとらえられていた仏教が、明確な信仰の構造を持ちはじめたのは、じつに善導の出現以来だ、と幸西は強調するのであった。

「この国でも同じことが言える。唐の文化ともどもに念仏も流入してきたのだが、それを正しく理解する僧はいなかった」

「幸西大徳。今、あなたがそれをはっきりと掴まれたでしょうに」

「わしがか？ 違う」

きっぱりと言い捨てた。

「まだ、どこか不明な点でも？」

「いや、すでに善導の念仏を正しく継承されたお方がこの国にいらっしゃるのだ」

「誰ですか」

「法然御房だ。東山の法然……」

幸西の足はすでに四明の山頂に立っていた。乳色の霧におおわれた京の朝景色を見おろす地点だった。

幸西はうるもった眼で霧の底を見つめている。独白は力強い叫び声に変質しつつあった。

「唐に善導がお出ましになったように、この国には法然御房が現れて下さったのだ」

二

この時点で、親鸞はまだ法然の存在を知らない。また、迷妄の厚い壁は成覚房幸西の説教だけでは除去されなかったようである。この朝から、なお一年有余、彼は地虫のように壁の裾を這いずりまわる。

親鸞はかなり頑固で、偏屈な性格だったようでもある。すでに法然の存在を、その教旨を、また信仰人とし

ての巨きさを知りつくしながら、簡単には接近しようとはしなかった。

建仁元年（一一〇一）の正月、親鸞はなお道法寺の六角堂に百日参籠し、彼自身の触手で迷妄の壁を掻き崩そうと試みる。ついに力尽きて、九十五日目の暁、結願を眼前にして六角堂を飛び出し、東山大谷の法然禅室へ走ったのであった。

ひとたび法然門へ参入したあと、親鸞の憑依ぶりがまた凄さまじい。法然に欺まされて地獄へ堕ちていっても悔いない、と広言する。

しかし、当時の念仏ひじりたちの法然への傾倒ぶりは、親鸞が格別だったとは言いきれない。性格や表現に異差があっただけである。

法然の死後、念仏ひじりたちは京洛の巷で、信者を集めて説法や別時念仏の集会を持った。つねに千人を越える大衆を動員したと言われる。念仏興行の指導者は成覚房幸西であり、空阿弥陀仏であった。

前にも触れたが、俊乗房重源を頂点に置く阿弥陀号を名乗るグループたちのことだ。重源は自ら「南無阿弥陀仏」と号した。これが本邦における阿弥陀号の最初だった。

た。

南無阿弥陀仏の新鮮な感触、現代流の表現を用いれば、フィーリングの魅力であろうか。

再度に及んで大陸へ渡航した重源が南無阿弥陀仏をひじり名にした事実、注目されている。称名念仏の「称名」に別な角度から考究のメスが刺されるはずである。

ところで別時念仏会で称名に励んだ専修念仏の僧俗たちが集会所に何を祀ったのか。

仏像、阿弥陀仏ではなかった。じつに法然の御影であった。法然その人に向って称名念仏に励んだのである。

このお方こそ阿弥陀如来の化身でいらっしゃる。一流の画人隆信がえがいたこの画像こそは、ありし日の法然御房をそのまま伝えている。これに向って念仏をとさえれば、間違いなく救われるのだ。

と、幸西たちは善男善女に強調したことであろう。

幸西の一念義を、思索力の強靱なる点で抜群、と近代の学匠たちに評価されるゆえんも、彼の師法然への傾倒ぶりが尋常一様のものではなかったからであろう。法然自身が「偏依善導」であれば、成覚房幸西はまさしく「偏依法然」であった。

法然が三昧発得へはいった同じ建久九年（一一九八）の五月、法然は夢のなかで先師善導とめぐり遇う。

一ノ高僧有り。雲中ヲ出デテ吾ガ前ニ住立ス。予即チ敬礼シテ尊容ヲ瞻仰スルニ、腰上ノ半身ハ尋常ノ僧相ナリ。腰下ノ半身ハ金色ノ仏相ナリ。予、ノ合掌低頭シ、問イテ曰ク。師ハ是何人ナルカ。答エテ曰ク。我ハ是、唐ノ善導ナリ。マタ問イテ曰ク。時去リ代異ナリ何ヲ以テカ今此処ニ来ルヤ。答エテ曰ク。汝ヨク専修念仏ノ道ヲ弘演ス。甚ダ希有ナリト。吾為ニ来リテ之ヲ証ス。

「夢感聖相記」の一節である。善導は法然夢に現れて、専修念仏の弘演をたたえ、自分の後継者と認定（証ス）したというのである。

これが、唐の善導から法然へ正しく継承された「師資相承」の証固物件である。

夢のなかで先師善導にお逢いして、念仏指導者としての印綬を受けました。だから専修念仏宗は正統な仏教教団である、と主張するかの如くである。

宗を内面だけ教でとらえる場合、幻視とか夢告は重要な支柱材となるであろう。宗教上の転機——回心には必ず時間空間からの飛躍が要求されるからである。

だが、教団結成という組織問題になると、この飛躍は逆に弱点となり兼ねない。果たせるかな、専修念仏宗結成の狼火を知った南部の衆徒たちは鋭くこの弱点をえぐってきた。有名な「興福寺奏状」がそれである。

奏状は第一条で「新宗を立てる失」として師資相承の不備を難じた。法然の念仏宗は如何なる伝統の祖師から継承したのであるかその手続方法の不備を追究してきている。五百年も昔に在世して地理的にも海をへだてた彼方の善導と、「夢のなかでめぐり遇った」では、何とも根拠が薄弱というほかはない。

この興福寺奏状は、笠置の解脱房貞慶が書いた。と伝えられる。

新教団念仏宗が組織されて五年後の元久元年（一二〇四）の十二月藏人頭三条長兼のもとに奏状は提出された。長兼の日記「三長記」が、すぐに解脱房貞慶を梅小路に訪ねて事情をただしているあたり、奏状の起草者であるとともに主謀者であったことを裏付けている。

法然を盟主と仰ぐ新しき教団「念仏宗」に向けた笠置解脱房の悪意――。

これは従来の宗門史家が首肯し難い背反として理解に苦しんできた点である。

不確定な資料だが、解脱房貞慶は文治二年の大東談義につらなっている。談義のあと、顕真の発議で会衆は高声念仏を開始したが、貞慶もそれに和したはずである。血脈の上でも貞慶の母は信西入道通憲の娘で、法然の周辺には縁故者が多い。

法然に好意を寄せこそすれ、論駁を加える立場ではなかったのである。

ことにその近年（建久八年ごろから）貞慶と念仏ひじり俊乗房重源との仲は、緊密過ぎるものになっていたのである。

法然と重源との深さは、いまさら詳述するまでもないであろう。

建久八年（一一九七）の八月には重源が完成に努力した播磨の浄土寺が落慶式を営んでいる。その導師に解脱房貞慶を招請した。

建仁三年（一二〇二）重源は仏師快慶に命じて金泥三尺

の阿弥陀如来像を東大寺に造進した。その開眼供養の導師を解脱房貞慶に依頼している。

「源平盛衰記」は巻二十五で興味深い逸話を紹介する。

東大寺にいた重源と笠置の貞慶とが同時に夢を見た。

重源は、貞慶が観世音菩薩、貞慶は重源が釈迦の化身だという夢である。翌朝、兩人はそれぞれ宿所を発し、お互いを訪問し合った。平野の三間率都波という地点で二人はばったり顔をあわせた。

お互いに昨夜見た夢を告げ、相互に三礼し合った。というのである。そのあと、重源は手をさしのべて貞慶に言った。

どちらが先になるかわからぬが、臨終を迎えた者は必ず相互の夢枕に立って、別離を告げようではないか。

建永元年（一二〇六）六月五日の夜、貞慶は夢告を得た。重源は娑婆の化縁すでに尽きて、たった今靈山にお歸りになった、と。

貞慶は驚いて使者を東大寺へおくった。するとその返事で、重源上人は東大寺の浄大堂で昨夜入滅された。ということであった。

自分と重源との関係がただ事ではないのを貞慶はあら

＜鞍馬口＞



ためて認識し、いよいよ追慕の念を深くしたそうである。それこそ水魚、刎頭の変わりを得た解脱房貞慶が俊乗房重源が属する念仏ひじりの集団を弾劾するとは……人の世の不可解さに立ち迷うことであろう。

だが、歴史はつねに同一資料の配置転換によって真相を浮き彫りさせるものだ。言葉を返せば、同じ方位、同じ順列で組み合せていたら謎は深まるばかりである。

建久の末年時から俄かに俊乗房重源と解脱房貞慶が接近した。それ自体に「興福寺奏状」の謎が秘められてはいないであろうか。

三

比叡山へ戻ったりしたために、幸西が行空とかわした約束の実現は遅滞した。約束とは、高野の蓮華谷へ俊乗房重源を訪問することであった。

一カ月近い時日が空しく過ぎた。

その昼下がり、鐘下ノ坊へ法本房行空が現れた。二人の念仏ひじりを同行していた。

「安楽房」

と紹介されたひじりは、色白でふくよかな面立ちをした美僧であつた。

「住蓮房」

こちらは精悍な偉丈夫だ。初対面だったか幸西は安樂房を知っていた。後白河法皇の側近にいた中原帥広。以前から禁裡で顔が売れていた。住蓮房は全くの無名である。

これから、ただちに重源を訪ねようという。

「高野まででは夜どおし歩かねばならん」

幸西の言葉を行空がさえぎった。

「大仏聖人は高野ではない。東大寺にいる」

「東大寺に？」

「どうやら身体を悪くして臥せっておられるらしい」

「もうお年だからなあ」

この年、重源は八十歳を超えようとしていたはずだ。

「浄土院というところらしい」

「浄土院……聞かぬ堂だな」

「最近、重源聖人ご自身が建立したそうな」

「東大寺までだったら……」

「夕景には着するであらう」

有無を言わせる行空で、坊内へ上がろうともせずになのままた次の行動をおこしていた。

それにしても夕刻には奈良、というのは無理な相談だ。宇治の平等院あたりへ今夜は泊るのであらうと、幸西は考えた。

だが鞍馬口まで降りてくると、ひとりのひじりが待ち受けていた。彼は五頭の馬を用意していた。

「馬でゆくのか」

「おぬし、馬は？」

行空が訊き返してきた。

幸西は武家の出身である。乗馬には馴れていた。

安樂も住蓮も、軽々と馬上の人となった。怪しげなのは法本房行空だけである。

待ち受けていたひじりが助けて行空の身体を押し上げている。

「おぬし……」

と、幸西はそのひじりの横顔を注視した。見おぼえがあつた。

「空阿弥陀仏と申します」

「以前は？」

「馬粥」

「ウマガニ……妙だな。名は忘れたが、たしか以前、三位中将の輩下にいたことがあるだろう」

「はい」

空阿弥陀仏は素直にうなずいた。同じ平氏の一門である。かくし立てをしても無意味である。

「役どころは何だったかのう」

幸西は執拗に問いつめてくる。

「役どころも名前もござりませぬ。空阿弥陀だけです」

男は突き放した。ただむやみやたらと馬体にしがみつ く法本房行空だけを例外にして、四人の念仏ひじりたちはいずれも巧みな手綱さばきで馬を疾駆させた。東大寺の構内。浄土院へ駆けこんだころ、未だわずかではあるが残光があった。

俊乗房重源は、青い顔をして寝床で起きあがった。

「法然のご房は達者かな」

彼らは法然の使者、というふれこみであった。重源が快よくおのれの寝室へ通させたのもそのためである。

「ひところは、だいぶオコリに悩んでおられましたか、いまは以前にまさるお元気で」

馬上で翻弄され、到着時には息もたえだえだった法本

房行空が、すっかり回復して円滑に受け答えしている。

やはり俊乗房重源に会えた、ということであつた。ちまちよみがえつたに違いない。

五人をぐるり見まわした重源は、

「何じゃ、お前も来ていたのか」

と、住蓮房に気づいた。

「しばらく音沙汰もなく。申訳ございません」

「いや、それはかまわぬ、わしとて居処定まらぬわ」

「お加減はどのように悪いのですか」

「うむ。痢が止まらぬ」

「こんなものが動くかどうか判りませんが、いささかでもお身体に力がつきますれば」

と、住蓮は持参した乳哺十枚ばかりを差し出した。

乳哺とは現在で言うビスケットの類いか。病人の体力付けには大豆煎や生乳と共に重要な食餌品であつた。

重源の病いは腸カタルでもあつたか。

「乳哺か、これは貴重な品、どこで手に入れた？」

病んでいても世事には敏感な重源。特定の上流階級にしかまわらぬ輸入食品の乳哺、その出所が気になるよう

である。住蓮はかたわらの安樂房へ視線をうつした。

「はい。仁和寺の法親皇に分けて頂きました」

仁和寺の法親皇道助は後白河法皇の五子、後鳥羽帝の実弟にあたる。

「仁和寺宮からか」

納得したかたちで、重源は乳哺を一枚、口へ入れた。

齒が丈夫とみえて小気味良い響きを洩らして噛んだ。

「して……法然御房の用向きは？ 書面を見せなさい」

五人は一瞬、顔を見合せた。書面なぞはなかった。

行空が説明する。

「書面では伝え得ぬだいじな秘事でございます」

「ほほう。秘事が、のう。法然御房がそんな……」

秘事なぞに参画してゆくとは考えられぬ。とでも言い
たげに硬く表情を結んだ。あけっぴろげではないにしても、
法然の誠実な性格は一切のかくし立てを許さぬもの
だった。重源は、その点をよく知っていたのである。秘
事の使者なぞしいかにも法然らしくない。

「これは天下の大事でござる」

行空は大見得を切った。法然の門下と否とを問わず、
今こそ全国の念仏ひじりたちが大同団結をし、乱れた世

の中 of 立て直しをはからねばならない。そのひじりのな
かで大勢力を擁しているのが俊乗房重源。

法然房と並んでこの新教団念仏宗のトップの座に就い
て欲しい、と行空は一気にまくし立てたのであった。

「新しき宗派を作るのだと？」

「はい。専修念仏宗でございます」

「それは法然御房も領解済みなのであるか」

「ご領解がなくて、何で手前どもがこちらへ」

重源は門弟の住蓮をかえりみていう。

「この方はおぬしがつれてきた人じゃが、何というお方
じゃったかのう」

「法本房行空で」

「こんな人が東山の太谷禪室にいたのかのう」

「常住の門下ではござりませぬが」

「ちょっと、その点を」

成覚房幸西は、この庵室へきて初めて口をひらいた。
法然の客員門中である点では行空も自分も同じである。
重源に説明を助えておかねばならぬ。

「おぬしも初めて見る顔じゃ」

重源は鋭い眼で幸西をにらんだ。

(つづく)

二 編集後記 二

○「蝸牛になるよりは雀のほうがいいさ、そうさ、なれるならそのほうがずっといいさ、釘になるよりは金鎚のほうがいいさ、そうさ、そのほうがずっといいさ」船出して遠くへ行けたらなあ、むかしこの辺にいた白鳥のように……」（コンドルは飛んで行く」より）——酔いしれるほどに、こんな歌（フォルクローレ）を聞いていると、アンドレスの谷あいにもいるかのようだ。チチカカ湖を渡ってくるインカの風が、ケーナの音色を乗せてくる。がんじがらめの殻の中に閉じこもった私自身が、鳥になって羽ばたくのはいつのことであろうか。しかしそれにしても、何百年もの間じっと耐えてきたインディオの誇りには、その音楽にこめられた哀調以上に、私をして驚かせるものがある。写真集などに見る人々の瞳は、まさに私を魅きつける。いつか、時が許せば、この地方に旅してみたい……。夏

の一夜、ふとこんなことを思う。

○「我々は無知で、貧しい」とインディオが自覚するとき、すでに長く培ってきたインディオの村落共同体の意識は崩壊したのかもしれない。しかし六百万人ものインディオが、中央アンドレスの山岳地帯にユーカーの緑に映える赤い瓦屋根をもってその集落を点々と形成する現在も、やはりかつての栄光と没落の歴史の上に営まれていることにはちがいない。確かに、太陽神インティを崇拝し、その輝くエネルギーをことごとく燃焼させた時代は、もはやはるかかなたの遠い想い出ではある。けれども、その雄飛した心は今に受け継がれて、雄々らかな自然のふところの中で淡々とした日々のなりわいに昇華されているのであろう。

○ところで、私たちの先祖のいのちは、その心は。また暑い季節がやってきて、魂迎えをする盂蘭盆会の時節となった。まず身近な家族の仏さまを偲び懷しんで、私たち日本人の心のふるさとに想いを馳せたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十四巻 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十三年 六月二十五日 印刷

昭和五十三年 七月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

＝新刊＝

『経典の知識 100』 須藤 隆仙 著

B 5 判 241 頁 定価 1300 円 (送料実費)

◎仏教経典の基礎的な知識を 100 の項目に整理して平易に説き明かした仏教入門書。豊富な用例とやさしい解説が、多様多量な経典とその難解な教えをよく解きほぐしてくれる好便の新書。

発行 新人物往来社

取扱 教学研究会

〒 040

函館市船見町18-14

振替 (函館) 5591

■極楽往生を願う念仏者たちの記録■

『近世往生伝集成』 全三巻

笠原 一男 編

A 5 判箱入 平均 580 頁

第 1 巻定価 6200 円 (送料実費)

◎江戸時代近世の庶民信仰の側面を、現存する史料を集成した往生伝の全容を呈示することによって説き明かそうとする画期的な企画。文部省の助成を受けて近世の諸往生伝がはじめて整理されることになったのである。皆様の購読を是非おすすめしたい。

発行 山川出版社

〒 101

東京都千代田区内神田 1-13-13

振 替 (東京) 2-43993